
小さな勇気で変わること

京都橋 秀直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな勇気で変わること

【Nコード】

N0255S

【作者名】

京都橋 秀直

【あらすじ】

ひねくれた作者による王道×ほのぼの×ダークファンタジー！
転校生の訪れによって変わりだした高校生・三郷智哉の結末はDark Happy!?

山崎彩里

今年入学する1年生が両親と共校門に立ててある入学式の看板と満開の桜を背景に写真を撮っている。

今年の校門の桜は去年三郷が入学したところより気持ち鮮やかに見えた。

三郷は新入生に入学式の案内を渡しながら、ひとりひとりの顔を確かめ席の番号を教える。

さすがにまだ緊張しているのか三郷が話しかけると、やけに丁寧に反応する生徒がいるのを見るのが少し面白い。

地元の学校であるので、新入生の4分の1ぐらいは三郷の中学の後輩で三郷を見つけると少し安心したように笑っている生徒もいる。

大体過半数以上の生徒が受け付けをし終わった後で、英語科の山崎先生に教員室に呼ばれた。

教員室に入ると、これから挨拶をする1年の学年主任や担当の先生たちがせわせわとプリントを用意していた。

教員室の中でも三郷が入っていたドアの反対側にある2年生の担任エリアは実に暇そうである。

初めての高校生活に忙しい1年生、受験に向けた勉強に忙しい3年生と比べると2年生は基本的に気楽だ、っと言っていたつい先日
の山崎先生の言葉を思い出した。

山崎先生の席にいくと先生と話している女子生徒がいた。

三郷に最初に気が付いたのはその女子生徒だった。

「来たよ。」

女子生徒は三郷に背を向けている山崎先生に話しかけ。山崎先生は三郷のほうに顔を向けるとまるで初めての宅配ピザが届いた時の

子供のような顔で笑った。

「三郷悪いな、自主的に入学式手伝ってもらって。」

「自主的って、半分強制ですよねうちのクラスは。」

少し冗談を交えて返すと、隣にいた新入生はクスリッと笑った。制服に目をやると胸ポケットのところに新入生のための花が飾つてある、ほかにも受付でもらった案内や紙袋などを持っていた。しかし紙袋に書いてある名前に三郷は一瞬だけ思考回路が止まってしまった。

「山崎……あやり？」

「彩里あいりです。初めまして。いつもお父さんがお世話になっています。」

深々にお辞儀をする山崎彩里をみて、そのまま視線を目の前にいる男にスライドさせた。

「この子娘さんですか？」

「そうなんだよ、おれのかわいい娘。今年からうちの学校に通うから三郷にも言つとこうと思って。」

「三郷にも、ってほかの奴にもわざわざ呼び出して自分の愛娘紹介してるんですか？」

「そうだけど、びつくりしただろ。」

山崎に今まで子供がいたっていう噂があつたことがない、そもそも結婚していいるとも聞いたことがなかった三郷は少し引きぎみに隣でおとなしそうな山崎彩里に視線を戻した。

確かによく見ると似ているところがある、目の大きさだったり、顔の輪郭だったり歳ながら渋いイケメンの山崎先生の綺麗な顔を受け継いでいた。

「そこで三郷、お願いなんだが彩里が学校に慣れるまで面倒見てあげてくれないか？ 親バカなのは分かっているんだ、やっぱり先生の娘ってことでいろいろ友達から気を使われると思うんだ。その部分をフォローしてやってくれ。」

「（本人の目の前で否定するのって失礼なんだけど、俺じゃなきゃ

ダメなの？　ほかにも自分の娘自慢してるなら、そっちに頼んでよ。」と小声で返す。

「（お前がいいんだよ先生は。何心配しなくて大丈夫、あの子はいい子だ。そして三郷もいい子だ。）」

山崎先生は三郷が高校に入学した当初から世話を見てもらっているわけだが、前々から根拠もなく多大なる信頼を三郷に寄せていたまに（いや基本的に）他の先生から頼まれた面倒事を三郷に押し付けてくるが、三郷のまわりの中で両親以外に信頼している大人でもある。

そんなこんなで結局山崎彩里の世話役を受諾した。

教員室にかかっている時計が入学式の30分前を指していたことに気が付いた三郷は、山崎彩里を連れて教員室をでて講堂に向かった。

「あの、お父さんが無理言ってますいません。私はあんまり気にしないで言うてるのに極度の過保護なんで……。」

「ははは、確かに山崎先生って生徒たちにも過保護の部分あるけど、なんだかんだで人気の先生だよ。」

山崎彩里は自分の父親が生徒に褒めてもらったのがうれしいのか、微妙だが雰囲気さらに明るくなった。

「でも逆によく自分の親が先生やってる学校来たね。」

「私面倒くさがり屋なので、やっぱり自転車で通える地元がよかったんですよ。」

「そうなんだ、とにかくなんかわからないことがあったら色々言うてね。」

新入生は講堂の正面玄関から入る予定だったため、三郷は山崎彩里を送って自分の手持ちに戻った。

接触

口数が少なく、ちょっと自信なさげだけど人には親切で山崎先生とは全くの正反対なのだろう、三郷は山崎彩里のことを決めつけたが、どうやら実際は三郷の勘違いだったようだ。

卒業式が無事終わり、退場とともに三郷を含めた在校生は1年生を各自自分のクラスに行けるように手分けして指示をだす。

1年のクラスでも校庭に1番近い教室の担当である三郷は、教室に入るとすぐに目に入る大きな校庭にはしゃいでいる新入生を見て、去年先輩に自分達もこんなに幼く見られていたのかと考えていた。この学校は都会から少し離れているために敷地にゆとりがあり、校庭や体育館はそれぞれの部活専用になっているほどである。

教室から見える校庭は主にサッカー部とその周りのトラックを陸上部が使っている他にも中学生と高校生の体育で使っているので、「第一運動場」と呼ばれている。

混雑した廊下の向こうから、山崎先生の愛娘である山崎彩里が女子生徒の小さな集団に交じって話しながらこちらに向かっているのが見えた。

三郷は自分の手元にある担当のクラスの新入生のリストに目を通すと、出席番号順の下から2番目に名前を見つけた。

（なんか山崎先生に仕組まれている気がする……）

と少し神妙な顔をしていると、三郷に気が付いた山崎彩里が軽く会釈をした。

近くにいた友人も山崎彩里につられて三郷に軽く会釈をして教室に入った。

「あの先輩知り合いなの？」

「うん、仲良い先輩。」

そんな教室から聞こえるやり取りを聞いて三郷は山崎先生を思い出した。

まだ会って2時間程度しか経っていない三郷のことを「仲良し」と言う娘山崎彩里。

去年まだ入学式も終わってなく、担任も分かっていない状況で最初から馴れ馴れしかった父親山崎先生、どうやらDNAは顔だけでなく内面にも影響を及ぼしているようだ。

新入生を教室に全員入れ、あとは担任の先生を待つのみになり一通りの仕事を終えた在校生は仕事が終わりに次第帰ってよいことになっていた。

三郷も仕事を終え友人が待っている教室に帰ろうとすると、教室の中から急いで山崎彩里が飛び出してきた。

「三郷さん、あの今日一緒に帰りませんか。HRもすぐ終わりますしどこかで昼ごはんたべませんか？」

「良いけど、先生は？」

「お父さんは仕事があるって言っていたので一緒に帰れないんです。」

「

「じゃあ玄関で待ってるね。」

「絶対ですよ。」

山崎彩里は右手の親指を立てグーサインを作り上機嫌で教室に戻った。

三郷も三郷で後輩に慕われるという貴重な経験を得たことで上機嫌でクラスに戻る。

2年生フロアは1年生フロアの1階上にあり、三郷のクラスはそ

の中でも1番トイレに近い場所にある。

ほかのクラスは入学式の手伝いをしている生徒が数人しかいないが、三郷のクラスには山崎先生に呼び出された暇そうな男子生徒ベスト10となぜか残りの10人もしっかり通学していて、傍から見たらボランティア精神旺盛のいいクラスだが、実際のところは山崎先生の「新入生はかわいい子が多い説」というエサにまんまとクラス男子生徒が全員が釣られたのである。

ちなみに三郷は序列第3位の強者(?)らしい。

「三郷のクラスどうだった？」

成瀬は三郷の帰りを待ってましたとばかりにものすっごい速さでよってきた。

成瀬はまあまあイケメン長身短髪でいかにも真面目にスポーツに打ち込むキャラにしか見えないのだが、ふたを開けてみると結構なミイハーぶりを発揮し、今では女子生徒の情報収集部隊の隊長務めるほどの健全な一般男子である。

「ううーん、多かった気がする。」

「本当に!?! 5組か、そっから組ね。体育の時間常に引き締めなくちゃな、でも逆にかっこよすぎて1年生で取り合いになったらどうしよう、おまけにr h b L K J H N M、P L O + < ゃ * + L K > < ? + L K J。 ^。 ー」

勝手に自分の絶対領域に入ってしまった成瀬をほったらかしとしてしといて、隣の友人に報告をきくと、標準つと返ってきた。

どうやら山崎先生の「新入生はかわいい子が多い説」は自分の愛娘がいるということで大幅に真実を誇張されているらしい。

20分ほど情報交換をし、帰る準備を始めると自分のドリーム空間からいつの間にか帰還していた成瀬は三郷を引き留めた。

「何、成瀬もう帰るの? いまからみんなで学食でご飯食べるけど。」

「えー、ちょっと用事があって、母さんから頼まれてる用事。だから今回俺パスっていうことで。」

「女だろ。」

三郷はうそをついたことを後悔した。このミーハー男成瀬は何かとこの手の話題になると鋭いことを忘れていた。

「女だろ。」

「……。」

「俺も一緒に行く！！！！　　じゃなきゃこの場で裏切り者の告発を開始するぞ。」

妙に威圧感を出して迫ってくる成瀬に恐怖心を覚える。

なぜかわからないがこのクラスの男子生徒には彼女ができない。

だからかいつの間にか「俺たち一匹狼組合」という訳が分からない組織が誕生し、裏切り者には容赦なく組合メンバーからありとあらゆる嫌がらせをされるのを今年2度見た。

たとえそれが山崎先生の娘だとしても、女子生徒と二人で帰るという行為には変わらないので絶対に裏切り物のレッテルを張られるのは目に見えている。

約束したのに遅れるのは少し失礼と思い仕方なく三郷は成瀬を足につけて玄関に向かった。

玄関にはHRを終えた1年生と保護者が待ち合わせの場所にしていたので山崎彩里を見つけるのに一苦労した。

そんな苦労を知らずに、父親譲りのフレンドリーさを発揮している山崎彩里はまだ会って2時間半程度しか経ってない三郷に完全に昔からの友人のように遅れたことを叱った。

「遅いですよ、本当に。こんなに人がいっぱいいる中、友達からの帰りのお誘いも断って待っていたのに。その辺に気が回らないとモテませんよ。」

「ははは、、、、（なんでもうこんなに馴れ慣れしいの？　恐るべし

山崎DNA！）ごめんね。」

「じゃあ行きましよ。駅前においしいパフェ屋さんがあるんですよ。お店は小さいんですけど駅ビルの大手チェーン店のパフェより3倍程おいしいんです！ さあさあ早く！！」

「ちよつと待つて、実は仲良いクラスメートと一緒にいきたいって無理について来られちゃって……。悪いんだけど一緒にいい？」

「良いですよ、三郷さんの親友ですか？」

「うん？ まあ親友かな。」

「じゃあ私とも親友ですね。」

どうやらもう完全に親友扱いにされているのに三郷は気が付いたが山崎先生との経験上スルーした。

「三郷、やっぱり今年は標準だよ。ったくヤマセンも適当なこと言ってくれたな。」

どうやらこの短時間である程度の物色をし終えた成瀬が追い付いてきた。

「成瀬、こつちが山崎先生の娘さんで彩里さん。お前も教員室に呼ばれて紹介されただろ？」

正直なところ、成瀬のことだから山崎彩里のレベルならいきなり抱きつくといったような日本人離れなことをしそうだと予想していたが、反応は意外にもびっくりした様子で山崎彩里を見ていた。

山崎彩里は少し不思議そうで、それでもって少し怒ったような目つきで成瀬を見ていた。

「???」

三郷はこの二人の反応の意味が少しわからなかったが成瀬が話出したので気にするのをやめた。

「なんだ、ヤマセンの娘か。」

少し気を落としたように成瀬は後ろを向いて、歩き出した。

「つええ、帰るの？」

「帰るよ」正直ヤマセンの娘は興味ないし。OUT OF 眼中だし。まあ、それに、僕三郷みたいにチャレンジャーじゃないからね。

いやまさか三郷がヤマセンの家庭に婿入り希望とは知らなかったよ。
」。

「ばっか！ そんなんじゃねえよ。ただ山崎先生に頼まれて……。」

「はいはい、未来の義父親^{おとうさま}は大切にしないとなあ。」

冗談で言っているのか本気で言っているのかわからないが、軽い足取りで成瀬はどかかに行ってしまった。

三郷は気が付いていなかったが、見えなくなった成瀬の方向をを山崎彩里は注意深く何かを探るように見ていた。

成瀬康

成瀬康は保護者や新入生で溢れる桜の木の下の校門までいっても、まるで背中をなでる様な感覚が残っていた。

成瀬にその感覚を与えているのは回りにいる保護者や新入生ではもちろんない。

先ほど三郷友哉と共にいた、短い黒髪が印象的な少女・山崎彩里である。

「（しかし娘が派遣されるとはどういうことだ？ 内面からの誘発的覚醒はオレで十分なはず。そもそもなぜ俺に報告が来なかった……。パートナーは誰だ？）」

成瀬はブレザーの胸ポケットから青色の二つ折りの携帯電話を取り出し、電話帳に唯一ある番号に電話をかける。

電話はすぐ通じて、学校の人気教師が対応した。

「私だ。どうした？」

電話相手の山崎勉は普段生徒と接する時のようなよく通る明るい声ではなく、少し相手との壁を作るような冷たい低い声である。

「どうしたもこうしたもない。どうしてお前の娘が派遣されてる？ 成果が出ないのは俺のせいってか？」

「なに、非覚醒体が覚醒しないのは君のせいではない。全て非覚醒体のせいだ。ただ……、さすがに上もそろそろ1つや2つ成果が欲しくらしてね。それで彩里は来てくれたんだよ。電話越しでもなんだ、一度家に来い。上からの伝達事項だ。」

電話は一方的に切れ、ブザー音が鳴っている。

成瀬は1つ小さなため息をつき、携帯をしまつと桜の木の下の広めの校門を抜け、駅ビルに向かった。

山崎勉の家は学校からさほど遠くないところにある。

駅ビルを通り抜けた先にある商店街と住宅街エリアのさらにその奥の上下の激しい坂を行った場所だ。

途中商店街にある唯一の小さな洋菓子店に成瀬は寄る。

周りに甘いお菓子の香りを漂わせているこの小さな洋菓子店は、駅ビルのデパ地下に押されている商店街のお店の中で、今はもう数少ない近所から愛され続けているお店である。

店に入るとケーキやクッキーなどのそれぞれ異なる甘い香りが成瀬を包んだ。

「成瀬君いらつしゃい、今日はどれにする？」

成瀬を出迎えたのは、このお店を支える職人の一人であるふくよかな女性である。

この女性は頻繁にケーキを買いに来る成瀬と仲良しで、よほど気に入られているのかよくアルバイトを勧められる。

「今日もチーズケーキとシヨートで。」

「はいよ、でもたまには違うもの頼んでくれるとうれしいんだけどね、どれもおばさんにとっては自信作だから後悔はさせないよ。」

「あはは、すいません。どれもおいしそうなんですけど、チーズケーキのおいしさは半端じゃなくて。つついそれにしちゃうんですよ。」

「シヨートはまた彼女にかい？」

おばさんはケーキを丁寧な箱に詰めながら、成瀬をからかうように顔を上げた。

「まったくいい彼氏だね、うちの旦那にも見習わしたいよあー。今度是她女もつれて来るんだよ。」

成瀬ははつきりとした意思を見せずにただ表情を明るくさせた。

おばさんも成瀬を見て微笑む。

実は何度もこの会話はしているのだがその度に成瀬がはぐらかすので、最初は気になっていたおばさんも何か事情があることを察し

て、現在はさほど以前よりしつこく問い詰めるようなことはしなくなった。

その意味でも、このお店に来ることは成瀬にとって居心地のいいことである。

ケーキが入った箱をおばさんから貰い、別れを言って店を出、再び山崎勉の家に向かった。

洋菓子店から5分ほどで山崎勉のマンションに着く。

隣の少人数洋の部屋が並ぶ大型のマンションと比べると規模は小さいが、どこことなくスタイリッシュに仕上がっている8階建ての水色のマンションはいかにも上流階級が住む建築といった感じである。

ガラス張りの厳肅なエントランスに入り、呼び出し用のインターフォンで4番を押す。

2回呼び鈴がなった後、マイクから小さな女の子の声が聞こえてきた。

「コウ！ ちょっと待っててね。今あけるから。」

ブザー音と共に扉が左右に分かれて開き、上の階に行くよつのエレベーターに乗って4階まであがる。

4階に着くとエレベーターの外でパンツにシャツといったラフな格好の山崎鈴やまざき すずが待っていた。

「コウ、コウ！ お姉ちゃんに会った？ 帰ってきたんだよ。」

「うん、知ってる。ちょうど学校でる時に会ったよ。」

「一緒に帰ってこなかったの？」

「1年生は学校で色々やってこなくちゃいけないからね。まだ帰ってこないと思うよ。」

「なんだつまらない……。」

鈴は肩を落とし、ドアを開けて家に入った。

おしゃれな8階建てマンションは基本的に1階ごとに1つしか部屋がない。

各階の構造も大体同じで5LDKである。

5LDKは姉が増えたとしても山崎家にとってはかなり大きめで、余っている部屋があるほどである。

いくら人気のある学校の人気教師だからといって、収入は並であるのは山崎勉がこのような豪華な家に住んでいるのか、かつて成瀬は不思議に思ったほどである。

ただその広さを誰一人として気にしている様子はない。

フロリングの日当たりのよいリビングには鈴の学校での作品や、家族写真がところどころに飾ってある。

テレビの前にある机の上には鈴のランドセルが置いてあり、その近くのソファに鈴は腰をかけた。

何個かの色つきのヘアピンをだして、手鏡と睨めっこを始めた。

成瀬はケーキをキッチンの冷蔵庫にしまった。

「お母さんは？」

「今お買い物中。まだ帰ってこないと思うよ。さっき行ったばかりだから。」

「そっか……。」

「コウ？ お姉ちゃんやつぱりかわいい？」

「お姉ちゃん？ うん、かわいいよ。」

鈴は姉である山崎彩里が褒められたのがどうもうれしかったらしく、鏡に映る顔がとても幸せそうに見える。

成瀬はそんな鈴を見ながら山崎彩里のことを質問した。

「なあ、鈴、お姉ちゃんが帰ってくることを知ってたの？」

山崎鈴は首を大きく横に振った。

「全然知らなかったよ。ママもパパも鈴のこと驚かせようと黙ってたんだもん。だからいきなりお姉ちゃん帰ってきてすぐうれしくて昨日泣いちゃった。」

山崎鈴は恥ずかしそうに手鏡を置いて、成瀬を見つめた。

「でも、コウも知らなくて良かった。やっぱりコウは意地悪しないだね。パパなんてまた今日の朝も意地悪したんだよ。」

山崎鈴が今日の朝の出来事を話そうとすると、インターフォンが鳴った。

「パパだ！」

山崎鈴はインターフォンの画面に自分の父親が写っているのを見て、先ほど同じように飛び跳ねてエレベーターまで山崎勉を迎えに行った。

成瀬はリビングを見回した。

山崎彩里が帰ってきたといっても、部屋に変わりはいま一つなかった。

あるとすれば食事用の机のマットが増えているくらいである。

「（やっぱり鈴には何も話さないのかあいつ……。）」

二人分の足音が近づいてき、ドアが開くとまるで神父のような優しい表情をしている山崎勉が現れた。

「ごめんね、遅くなって。ええっとじゃあ早速書斎で話すかい？」

「駄目だよ！ コウまだ来てちよつとしか経ってないんだから、もうちよつと鈴と遊ぶ。」

山崎鈴は力いっぱい父親の背中を押して成瀬を取られないようにするが、父親である山崎勉はビクともしない。

普段ならばこのまま鈴と遊んであげたい成瀬だが、今回は上からの報告を聞くほうが大事なので鈴をなだめる立場を取った。

「ごめんね鈴、ちよつと山崎先生とやらなくちゃいけないことがあるから待ってて。冷蔵庫にケーキ入れといたから食べていいよ。」

山崎鈴はまだ反抗したそうな目をしていたが、それを見ぬ振りをして山崎勉の書斎に向かった。

山崎勉の書斎は茶色を基調とし、積み立てられた本や世界中のお

土産によってアンティークな雰囲気醸し出している。

山崎勉は鈴が気に入りのテレビ番組をみながらケーキを食べるのを確認して、扉を閉めた。

成瀬は木製の円筒の椅子に腰をかけ、山崎勉に視線を向けた。

「で、伝えたいことっていろいろのは？」

「彩里が来ても任務の内容が変わるってことはない。お前は今まで通り「共鳴による内面的誘発による覚醒」をすればいい。ただ彩里と二人で実験のペースをあげろだ。」

「それだけかよ、ならいつもみたいに電話でよかったんじゃないのか？」

山崎勉は鞆の中から茶封筒とを取り出した。

成瀬は受け取った茶封筒を開けると中には1枚のプリントと写真が入っている。

写真の裏には「永山太郎」ながやまたろうと書いてある。

「こいつがどうにかしたのか？」

「永山太郎……、初の細胞の人為的操作の覚醒者として発見されたんだが、最近になってある事実が発見したんだ。」

「事実……？」

「お前半年ほど前にあった1大研究チームの崩壊知っているか？」

「あの薬物投与による強制的覚醒実験のことだろ？ こいつも被験者の一人なのか？」

「その実験において唯一の成功例って言われていたんだ。」

山崎勉は胸ポケットからタバコを取り出し吸い始めた。

「言われていた……？」

「そう数週間前に副作用が出るまでな。理由は判らないが自己抑制ができなかったらしく、不運にも全ての覚醒体が出払ったから研究者たちも手が出せずに、本部が半壊したらしい。」

「半壊って……、能力は？」

「人為的による筋肉細胞の活性化だ。かなりの精度を高いらしい。そいつが今関東に逃げた可能性があるから、関東にいる研究者及び

覚醒者は見つけ次第捕獲しろだと。これが上からのお前への伝達事項。」

山崎勉は退屈そうに頭をかき、2本目のタバコを吸い始めた。

成瀬は書類を1つ1つ目を通して、上からの伝達事項が完全に伝えられていない事に気が付いた。

「だが永山は完全なる戦闘向きの覚醒者だ。俺とは相性が悪い。まだ上からなんかあるんだろ早く言え！」

山崎勉はタバコをくわえながら少し馬鹿にしたような笑い声をあげた。

「つたく、研究者の犬である覚醒者が頭良すぎてどうする。お前らはもつと静かにしていて、私たちの命令に従ってればいいんだよ。……、そうだよまだある。お前の能力関係なしに、それとまともに向き合って勝てる覚醒者はいないだろう。上もそこを良くわかった上でしっかり送ってきてくれたんだよ。」

「山崎彩里のパートナーか？」

「書類上はそうなっているが、彩里は知らない。」

「どうということなんだ？」

「なんせ相手が特別だからな、こつちも特別。」

山崎勉は笑うのを堪えているのか、苦しそうな顔をして間をおいた。

オリジナル

「原種の一人だよ。」

「オリジナル……」

予想もしていなかった答えに圧倒された成瀬はその場で止まってしまった。

渡辺洋菓子店

勉強も学年で中位、運動も野球部に入っているだけに悪い方ではない三郷は基本的に好青年である。

朝寝坊で朝のHRに遅刻することも、授業中に眠くなったり、宿題を忘れることもあるがそれで先生に反抗したり、友達をいじめたり、学校をサボったりといったようなことはしない。

どちらかというと学校生活の関与には積極的で、部活帰りに皆で遊んだり、文化祭にしっかり参加するので友人も多い。

そういう訳で三郷の学校の生徒が遊び場としている駅周辺は人並みに知っていた。

学校側もどこか違う場所で何か問題を起こされるなら、目の届く範囲で遊んで貰った方が良く考えたのか、駅ビルのお店にも協力を要請した。

そのおかげで生徒たちは特別料金で買い物が出来る。

店側にとっても生徒が話す何気ない世間話は、店の売り上げを左右するほど重要なのである。

どここのお店がおいしい、などといった情報はもちろん生徒にとっては掛け算を覚えているぐらい常識なのである。

しかし今目の前にある、渡辺洋菓子店という看板を掲げた小さな洋菓子店は一度も噂を聞いたことがない。

いくら本拠地である駅ビルの外だと言っても、向かいの道路にあるそば屋は教員達のお気に入りのお店として有名である。

三郷が知らないのは、離れているからという理由は当てはまらない。

ましてや新入生の山崎彩里が知っていて、三郷が知らないというのはいささか不思議である。

まるで森の中の木小屋のような小さな洋菓子店は店の規模に似合わず、豊富な種類のケーキが揃っていた。

「三郷さん、どれにします？」

山崎彩里は身をかがめショーウィンドウにへばりつき、あれもいいこれも良いと一人で呟きながら目を輝かした。

その姿は小学生に見えるほどである。

三郷はもうすでに決めてある。

いつからか分からないが、どのお店に言っても三郷は必ず同じケーキしか注文しない。

「え〜と、チーズケーキで。」

ジブリ映画に出てくるパン屋の女亭主のような店員は、三郷の制服を眺め少し驚いたように笑い出した。

「なんか変ですか？」

「いや変ではないんだけどね、いつも来てくれている君と同じ学校の子もいつもチーズケーキだから。」

店員はその子のことを思い出したのか、うれしそうに笑っている。ショーウィンドウにへばりついていた山崎彩里はようやくなにするか決めたらし、顔を上げた。

「私チョコムースとマロンとフルーツタルトとそれと……、ミルフィーユとロールケーキってどっちの方がおいしい？」

「どちらも自信作。どっちを選んでも後悔はさせないよ〜、お嬢さん。」

「う〜〜〜じゃあ、両方とも！」

「ありがとうねお嬢ちゃん。やっぱり色々なものを食べてもらえるとうれしいよ。食べ終わったら感想教えてね。」

店員は嬉しそうにトレーに大量の二人分のケーキを載せた。その動作を山崎彩里も小学生並みの関心を持って目で追う。

その姿は今にもヨダレを垂らしそうなほどである。

三郷は小柄の大食い少女を一步引いてみると、視線に気が付いた山崎彩里は我に返ったように苦笑いをした。

「よく食べるねそんなに……。」

「あはははは、まあお昼食べてないですし甘いものは別腹ということとで……。」

山崎彩里は自分から食事に誘ったのに、三郷を連れてきたのはケーキ屋なのである。

育ち盛りの三郷にとって上品なケーキ1つで腹を満たすことは到底できない。

トレーを持って奥のイートインコーナーで入ると、店の外からだとわからないが結構混んでいた。

中には先輩らしき女子生徒もいる。

「（やっぱり俺が知らないだけなんだ……。ここって隠れ家的名店で、知る人ぞ知るって感じなのかな？）」

ちようど角の席が空いていたので座ると、小型大食い少女はさっそくチョコムースに取りかかり、一口食べると驚嘆の声を上げた。

おいしそうに食べる山崎彩里を見て三郷もチーズケーキを一口食べる。

「おいしい……、すごくおいしい。」

「ですよ〜。やっぱり三郷さんは物分かりが良い！」

山崎彩里は得意のグーサインをする。

大したことではないが後輩に褒められると自然に三郷から笑顔がこぼれた。

1時間ほど楽しく話していると主婦たちがママ会を始めた。

気が付くといつの間にか店はさらに混雑していた。仕方なく二人は店を出ることにした。

三郷は店を出た後感想を店員に言うことを忘れていたことに気が付いた。

「（まあ〜今度来たときに言えればいいかな。にしてもおいしかった。

」

時間はまだ2時過ぎだったので、三郷は駅ビルで遊ぶことを提案しようかと思っただが先に山崎彩里が帰る話を持ち出したのでしぶしぶ帰ることにした。

いざ帰ろうとすると山崎彩里は思い出したかのように、通学鞆から携帯を取り出した。

「三郷さん、メアドと番号教えてくれませんか？」

「良いよ、ちょっと待って。」

三郷はズボンのポケットから二つ折りの携帯を取り出し開けた。するといきなり山崎彩里は三郷の体をびったりくっつけて三郷の携帯の待ち受けを覗きこんだ。

「わゝ、三郷さん家のネコちゃんですか？ これ何っていう種類でしたっけ？ でもペットは飼い主に似るって言いますけど本当にそうなんですネ、目とかそっくりです。」

「そう？」

「そうですよ、顔立ちもかわいいし……。」

山崎彩里は言い終えると恥ずかしそうに下を向いてしまった。

健全な男子生徒である三郷にもその行為のおおまかな意味は知っている。

なにか言おうと試みるが、免疫ゼロの三郷は余計に口ごもってしまった。

数秒間の沈黙が続く、このまま沈黙が続けば続くほど三郷の頭の中にはに坎でしまいそうな妄想が増えていつてしまいそうなので話を元に戻して、メアドと電話番号を赤外線通信で交換した。

「ありがとうございます！ あれ？ 三郷さんってストラップなんにもつけないんですか？」

山崎彩里は全く飾りつ気のない三郷の携帯を指差した。

「どちらかというとね。」

三郷は控えめに言っただが心の奥では実は大っ嫌いであった。

よく変なモコモコしたしっぽみたいなストラップを大量につけて

いる人がいるが、三郷からみたらなぜ携帯の特徴である軽量を自ら奪い取るのが理解できなかった。

山崎彩里の携帯に目をやると、その謎のモコモコ物体が数個と大量のストラップがついている。

しかしそれを見ても三郷は不快にはならない自分がいることに気が付いた。

「（男っていうか、俺っていうか本当にばかだな）。普段あんなに嫌がっているのにかわいい子がつけていると別にいやじゃないなんて。」

三郷は心の中でため息をつき、自分の未熟さというかバカさを嘆いた。

すると山崎彩里は自分のストラップのうちの一つの柴犬のストラップを外し、三郷に渡した。

なんとも言えない不細工な柴犬である。

「それじゃあ、また明日からよろしくお願いします！」

「よろしく。」

「っあ、たまに電話するんでしつかり出てくださいよ。」

山崎彩里は確認するように右手の人差し指と中指でOKマークをつくった。

家が近くにあるといって山崎彩里と別れて駅ビルに向かった三郷は今日が月曜日であることを思い出し、週刊漫画雑誌えお買うために駅ビルの中の6階にある本屋に立ち寄ることにした。

目的の雑誌はレジ横にあることは分かっているので、直接向かうとすると男性向けのファッション雑誌の小見出しが目に入ってきた。

新学期最高のスタートを切る7か条

これさえやれば君もクラスの人気者

！？！

普段なら絶対に手に取るはずのない雑誌である。

そもそも三郷はファッションに強いこだわりはない。

成瀬のように自分に似合うスタイルを知っている訳でもない。

よって、成瀬のカッコよさに憧れつつも自分からファッションの勉強をしようという気が起きないので必然的にいらない雑誌なのである。

しかし、人間というのが最高にバカで悲しい生き物なのかもしれない。

少なくともいまこの瞬間の三郷は哀れな男なのである。

後輩にモテるコツ　　まずはここから

こんなどうしようもない小見出しを真に受けて手に取るほどの哀れな男なのである。

本来の目的である漫画雑誌と余分なファッション雑誌を通学鞆にしまい、本屋を後にする。

駅ビルの外に出ると優しい陽だまりの香りとともに暖かな春の風が撫でるように三郷を包んだ。

ポケットの中にある少し不細工な柴犬を取り出すと自然に三郷の口から言葉が出た。

「明日から楽しみだ。」

妹達

三郷家には2人の妹達がいることに家族内の意識はなっている。1人はいつでもハイテンションで動き回る元気が取り柄の「薫」。もう1人は三郷がTVを見ているといつも膝に乗つかる「花」。そんな二人は6時に三郷の目覚し時計が鳴ると一階の自分のベッドから飛び出して階段を音を立てあがる。

三郷の部屋の前に着くと、ドアを慎重に少し空けて中の様子をチェックする。

布団にくるまって寝ている三郷を見ると、二人はお互いに顔を見合わせニヤリとすると、今度はバンッと音を立て三郷の上にダイブする。

朝から兄に構って欲しいとダイブしてくる二人は本当に可愛らしい。

ただ難点がある。

「っ痛！　　ったく薫朝から爪立てるな。」

なかなか起き上がるとしない三郷に大して薫はさらに攻撃する。

「分かったから、分かった起きるから薫止めて！」

三郷はさらに攻撃しようとする薫を持ち上げ、目の前にいる可愛い二人の猫の妹に挨拶をする。

「おはよう。」

二人もそれぞれ挨拶らしき鳴き声をあげる。

三郷家の二人の妹は猫なのである。

何故かというと、三郷の兄の大学進学で寂しくなるのを嫌った母親は、丁度親戚の家で生まれた子猫を譲り受け、二人をペットしてではなく本当の家族として大切な存在に位置付けた。その為、三郷と父親が知らない間にいかにも人間らしい名前が付いた。

そんな母親の愛情を二人は理解しているのかご飯を食べるタイ

ミングや風呂などしつかりと三郷家の生活リズムに合わせている。そんな猫としては少し変わっている二人の一番面白い日課は家族と一緒に散歩する事である。

大体は母親の買い物に本当の子どもみたいについていく。しかし母親が店に入った時は外で静かに座っているその姿があまりに賢くて可愛らしくて商店街の噂になり今では人気者である。

三郷はパジャマを脱ぎ、ランニングの出来る格好に着替える。

二人は特に朝の三郷との散歩を楽しみにしている。

始めは部活に入った三郷が体力作りの為に始めたのだが、元気が有り余ってしょうがない薫がいつの間にかついて来るようになった。しきりにせかす薫の横で軽くストレッチをして部屋を出る。

嬉しさのあまり薫は三郷の足下をすりぬけ階段の上を滑るように降りる。

しかしその後には花の姿が無い。

三郷は振り向くとまだ温さが残っているだろうベッドの上で気持ち良さそうに布団とじゃれている花を見つける。

「おい花。俺だけ薫に付き合わせるなんてずるいぞ。花も一緒に来い。」

布団に抱き付いている花を持ち上げると、

「えー、もうちょつと寝たいです。」

と言いたげそうな鳴き声をだしながはあくまで抵抗する。

外は明るくなっていたがまだ少し冷たい空気が三郷を目覚めさせる。

靴紐を堅く結び直し、軽く走り始める。元氣全開の薫とまだ不満をこぼしている花も後から着いてくる。

「（今日は軽くすまそうかな）」

そう考えて三郷はいつもよりゆつくりと走る。駅とは逆の公園に向かつて走っていると隣に三郷と同じくランニングフェア姿で走っている男性がいる事に気がついた。三郷は若干ペースを遅らそうとしたが既に時が遅かった。

別にランニングをしている男性には何も非はない、ただ問題なのは男性と一緒に走ってる犬なのだ。

三郷は背後から漂う気を感じて振り返ると、闘志をふつつつと燃やしている薫が目で命令してくる。

「ちよつと、なんであんな何処の骨か分からないもん加えていそうな奴に負けてるんだよお」。もつと早く走れ！ 追い抜かせ！」

こんな感じに。

三郷はペースを変えずに少し呆れて言い返す。「なあ薫。別に猫が犬に負けるのが格好悪いとかって事はないんだから、朝から対抗心燃やすのいい加減辞めてくれない？」

言い返された薫は今だに対抗心を燃やして犬を見つめていたが、少し驚いた顔をする。次の瞬間いきなり猛ダッシュで犬に向かつて行った。

薫に気がついた犬も負けじと走りだし、飼い主の男性が転びそうになる。

そして飼い主から開放された二人は遠くに見える公園の入口まで凄い勢いで走っていく。

三郷は追いかけようとしたが、足を誰かに引つ張られた。

足下に目をやると、花が地面に大の字になっている。

「ほら花、薫迎えに行かないと喧嘩始めるんだから立って。」

花は少し顔をあげ、かすれた声で三郷に訴える。

「お腹減ったです。もう動けません。お兄ちゃんおんぶして。」

三郷家には2人の妹達がいることに家族内の意識はなっている。

1人は朝から対抗心を燃やして逃走する「薫」

もう1人は散歩なのに自分の足を使わない「花」
二人とも世話が本当にかかる、三郷の可愛い妹達である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0255s/>

小さな勇気で変わること

2011年4月21日22時40分発行